

他者の欲望を無意識に模倣することはどのようにして可能か？¹

入江幸男（大阪大学）

人間の実践的な活動の研究において、欲望と模倣は、重要な基礎的な分析対象になるだろう。ジラールの欲望論が正しいかどうかはわからないが、それは非常に啓発的である。彼は、我々の欲望が他者の欲望を模倣したものであることを主張するが、同時に、その模倣が無意識に行われていることも重要な論点である。²ここでは、他者の欲望の無意識の模倣がどのようにして可能になるのかを明らかにしたい。

1 意識的な模倣と無意識な模倣

(1) 意識的な模倣の分析

ある人 S が他者 M の欲望を意識的に模倣しているといえるためには、次の条件が満たされていることが必要だろう。

- ① S は、対象 O を欲している
- ② M は、対象 O を欲している
- ③ S は、S と M が同一の対象 O（ないし類似の対象）を欲していることを知っている
- ④ S は、M が対象 O を欲するから、対象 O を欲している

もし①②だけが成立しているならば、S と M の欲望が（偶然であれ、何らかの原因によってであれ）一致しているというだけである。意識的な模倣が成り立つためには、③と④が必要である。なぜなら、もし③が欠けて①②④だけが成立しているとき、模倣していると言っても、意識的な模倣にはならないからである。また④が欠けて①②③だけが成立しているときには、S と M の欲望が偶然に一致している場合も含まれるからである。

では、①②③④の条件で十分だろうか。そうではないだろう。なぜなら、もし①②③④が成立していても、④が成立していることを知らなければ、模倣していると言っても、それを意識していないことになるからである。そこで、次の条件を付け加える必要がある。

- ⑤ S は、④を知っている

¹ 本論文は、第二回 *Imitatio* 研究会（2010年12月18日、ICUにて）において発表した原稿に、発表後の質疑を踏まえて加筆したものである。とりわけ、無意識の意図的模倣は存在しないのではないか、という疑問を提起された *De yume* ジル氏に感謝したい。

² 彼は多くの箇所述べているが、たとえば、ジラール『世の初めから隠されていること』小池健男訳、法政大学出版局、1984年、第三章「人間化の過程」を参照。ただし、最近のジラールは「無意識」に代えて「無知」を使用するようである。ジラールは、『文化の起源』田母神顯二郎訳、新教出版社、2008年、第二章、「4、無知」では、フロイトの「無意識」に反対して「無知」を使用している。ジラールがフロイトの「無意識」を批判するのは、無意識を心の中に存在するものとして考える本質主義を批判するからである。

③と⑤の「・・・を知っている」という条件が成り立つのは、もしSが「あなたは、・・・を知っていますか」と問われたら、「知っています」と答えられるということである。

(2) 無意識の模倣の分析

次に、無意識の模倣が成り立つための条件を考えてみよう。人物Sが人物Mの欲望を意識的に模倣することが成立するための上記の5条件のうち、もし③が欠けているとすると、SはMが対象Oを欲していることを知らないのだから、仮に④が成り立っているとしてもそのことを知らない。したがって、⑤が成立しない。つまり、①②④だけが成立して③と⑤が成立しない場合には、無意識の模倣が成立しているといえるだろう。また、上記で考察したように、①②③④だけが成立して⑤が成立していない場合もまた、無意識の模倣が成立しているといえるだろう。つまり、無意識の模倣には少なくとも二種類ある。

無意識の模倣タイプ1

- ①Sは、対象Oを欲している
- ②Mは、対象Oを欲している
- ③Sは、SとMが同一の対象O（ないし類似の対象）を欲していることを知っている
- ④Sは、Mが対象Oを欲するから、対象Oを欲している
- ⑤Sは、④を知らない

無意識の模倣タイプ2

- ①Sは、対象Oを欲している
- ②Mは、対象Oを欲している
- ③Sは、SとMが同一の対象O（ないし類似の対象）を欲していることを知らない
- ④Sは、Mが対象Oを欲するから、対象Oを欲している
- ⑤Sは、④を知らない

この無意識の模倣タイプ2に属しているものとして次の場合が考えられる。ミラーニューロンによって知覚に関する信念を介さないで他者の欲望に似た欲望が喚起されているのだが、模倣になっていないことに気付いていない場合が考えられる。たとえば、隣の人がケーキを食べるのを見て、自分もまた同じケーキを食べたくなったのだが、このときに自分が食べたいと思っているケーキが隣の人が食べているケーキと同じことに気付いていない場合である。この場合には、④の中の「Mが対象Oを欲するから」の「から」は、自然的な因果関係を表現しており、「理由」の表現ではない。このような無意識の模倣を「自然的模倣」のタイプ2と呼ぶことができるだろう。

無意識の模倣タイプ1には、次のような場合が考えられる。Sの欲望がミラーニューロンによって引き起こされたのだが、Sはそのことを知らず、Sは自分の欲望とMの欲望が一

致することを認めるが、しかし、自分がMの欲望を模倣したとは思っていないという場合である。たとえば、前述の例でいうと、自分が食べたいと思っているケーキが、隣の人が食べているケーキであることには気付いているのだが、その欲望が、隣人がケーキを食べるのを見たから発生したのだとは気付いていない場合である。この場合、模倣タイプ1の条件④の「から」は、自然的な因果関係を表現している。これを「自然的模倣」のタイプ1と呼ぶことができるだろう。

これらの「自然的模倣」はミラーニューロンによって生じると思われるので、ミラーニューロンと自然的模倣の関係について瞥見しておきたい。

(3) ミラーニューロンによる自然的模倣³

マカクや人間には、ミラーニューロンがあり、相手の動作を知覚すると、自分がその運動をする時に働くニューロンが活性化される。たとえば、人間が食事をしているところを、マカクがみるとき、彼が食事をするときに動かす口などの運動野や味覚を味わうときの知覚野が活性化するのである。別のマカクがある果物を取ろうとしているのを見ると、別のマカクは、別のマカクの動作を知覚するだけでなく、それが物をつかもうとする運動として理解し、同じような運動を引き起こすニューロンが活性化するといわれている。別のマカクには、その行為の意味がすぐに理解でき、その感情や、その運動のニューロンが活性化される。ミラーニューロンによって、運動ニューロンが活性化しても、常にその運動が行われるのではない。つまり、運動ニューロンの活性化の後に、運動を抑制したり、運動を促進したりする別のメカニズムが働いている。我々は自動的に他者の振り舞いや運動を模倣するのではないからである。この点で、運動の場合と感情の場合には、すこし事情が異なるかもしれない。運動ニューロンが活性化しても、運動するわけではないのに対して、感情のニューロンが活性化するときには、感情を感じているのではないだろうか。欲望のニューロンが活性化するときには、欲望を感じているのではないだろうか。(これは現在のところ私の単なる予想である。もしこれがただしならば、我々は、人間の欲望がどうして常に模倣的であるのかを説明することができるだろう。)

もちろん、欲望が生じて、それが常に行為を引き起こすのではない。この点が欲望と意図の違いである。意図の場合には、そのあと行為が続くことになる。もし他者の意図を知覚したときに、意図のニューロンも活性化するとしても、その場合には、運動と同様に、意図のニューロンの活性化のあとで、それが現実的な意図になるわけではない。

我々は他者の感情や欲望を知覚した時に、ミラーニューロンによって自動的に、同じような感情や欲望をもつといえそうである。(ただしその強さに違いはあるかもしれない。)感情や欲望については、自然的模倣が可能であるように思われる。しかし行動については、ミラーニューロンが活性化するだけでは、直ちに行動につながらないので、自然的模倣の

³ 参照、ジャコモ・リゾラッティ&コラド・シニガリア『ミラーニューロン』柴田裕之訳、茂木健一郎監修、紀伊国屋書店、2009年。

余地は少なるかもしれない。しかし、近くの人のおくびが移ったりすることはあるので、行動についても自然的模倣はありうるだろう。

(4) 意図的模倣

以上のように、ミラーニューロンによって、無意識な欲望や行為の模倣を説明することができる。それは「自然的模倣」であり、条件④の「から」が自然的な因果関係を意味している。しかし、我々が多くの場合に考えている「模倣」とは意図的な行為であり、条件④の「から」は自然的な因果性ではなく、「理由」を表現するものになっている。たとえば、「隣の人が3DTVを買ったから、私もそれを買おう」という場合の「から」は、自然的な因果性ではなくて、理由を表現している。これを「意図的模倣」と呼ぶことにしよう。

次に、意図的模倣とはどのようなものであり、無意識の意図的な模倣がどのようにして可能になるのかを検討しよう。

2 意図的模倣の分析

(1) 他者の模倣の一般的分類

我々は、「意識的模倣」と「無意識的模倣」のタイプ1とタイプ2を区別した。ここでは、模倣が意図して行われている「意図的模倣」と、意図を介さずにミラーニューロンによって自動的に行われている「自然的模倣」の区別を考慮して、模倣の分類を考察しよう。

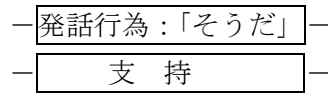
また、これまでは欲望の模倣に注目してきたが、行為や判断の模倣も含めて他者の模倣の一般的な分類から考えよう。上記の区別を組み合わせると次のようになる。

意識的模倣	——意図的模倣	(CIM)
	——自然的模倣	(CNM)
無意識的模倣1	——意図的模倣	(UIM1)
	——自然的模倣	(UNM1)
無意識的模倣2	——意図的模倣	(UIM2)
	——自然的模倣	(UNM2)

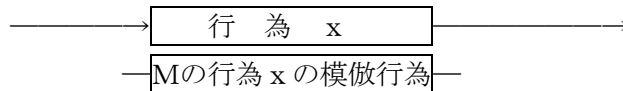
(2) 意図的模倣の分析

意図的模倣について、一般的に説明しておきたい。意図的な模倣は、意図的な行為の一種だと考えられる。よく知られていることであるが、一つの行為ないし振る舞いについて、我々は複数の記述を与えることができる。たとえば、声を出す行為によって、我々は発話をおこなう。「そうだ」という発話を行うことによって、ある人を支持するという行為をおこなう。

————→ [発声行為 : [so:da]] ————→



ここでの、発声行為、発話行為、支持という3つの行為は、一つの振る舞いについての3つの記述である。もちろん、この3つは独立しているのではなく、また対等の関係にあるのでもない。発声行為が成立しなければ、発話行為は成立しえず、発話行為が成立しなければ、支持も成立しえない、という関係になる。一般的に述べると次のようになる。同一の振る舞いについて行為 x_1 と行為 x_2 という二つ（ないしそれ以上）の記述が可能な場合があり、しかもその場合に行為 x_1 の記述が成立することを前提して、行為 x_2 の記述が成立するという関係が整理する場合がある。このとき、行為 x_2 を行為 x_1 のメタレベルの行為と呼ぶことにしよう。模倣行為は、このようなメタレベルの行為の一種である。



S が行為 X によって、モデルMの行為の模倣を行っている場合に、「Sがある行為 x を行っている」と記述される行為について、「SがMの行為を模倣している」という別の記述が可能である。これらは二つの行為ではなくて、一つの振る舞いについての二つの記述である。そして、行為 X の記述が成立することによって、Mの行為の模倣が成立する、という関係にある。

行為2が行為1のメタレベルの行為になっているとき、行為1に気付いていても、行為2に気付いているとはかぎらない。上記の例でいうと「そうだ」と発話したことに気付いているが、それによってある人を支持することになることに気付いていない場合もありうる。模倣行為の場合にも同様であって、Sが行為 x を行うが、それが他の人の行為を模倣することになっていることに気付いていない場合もありうるかもしれない。これは無意識の模倣タイプ1 (UIM1) である。またSが行為 X を行うが、それがMの行為と類似していることに気付かないこともありうるかもしれない。これは無意識の模倣タイプ2 (UIM2) である。このUIM1とUIM2の可能性について後で検討する。

ところで、意図的な模倣が意図的な行為の一種であるとして、意図的な行為とは何だろうか。アンスコムの定義を用いると次のようになる。⁴「何をしているのか」と問われて、観察によらず即座に「コーヒーを入れています」と答えられ、さらに「なぜそうするのか」と問われたら、観察によらずに即座に「なぜなら、一服するためです」などと答えられるような行為が意図的な行為である。

⁴ G. E. M. Anscombe, *Intention*, Oxford, 1957. アンスコム著『インテンション』菅豊彦訳、産業図書、1894年。

「何をしているのか」

「コーヒーを入れています」(行為)

「なぜそうするのですか」

「一服するためです」(行為の理由/意図)

この定義によるならば、意図的な行為の場合には、常にその意図を尋ねられたら即座に答えることができることになる。つまり、無意識的な意図的行為は、この定義によってありえないことになる。しかし、我々の検討課題は、「無意識の意図的な模倣行為はどのようにして可能になるのか」であった。では、この課題に取り組むためには、我々はアンスコム
の定義とは別の定義が必要だろうか。そうではないだろう。なぜなら、仮に無意識の意図的な行為があるとしても、その行為はまったく意図のない行為つまり非意図的な行為として理解されているのではなくて、無意識の意図とは別の意図をもつ行為として理解されていると思われるからである。サールは次のような催眠実験の例を挙げている。

「典型的な催眠実験では、催眠状態の被験者に対して「あなたは催眠が解けた後で『ドイツ』という単語を聞いたら窓を開けるようになります」と言い渡されたとされる。実験では、被験者はドイツ」と聞くやいなや、窓を開けるのに非のうちどころのない理由を捻出し、こんなふうに行った。「ここはひどく蒸し暑いですね。新鮮な空気を入れましょう。窓を開けてもいいですか？」被験者は自分の行動を完全に自由であると思いついでいる。⁵

そこで、アンスコム
の意図的な行為の定義を受け入れたうえで、我々の検討課題を次のように言い換えたい。「ある意図的行為が同時に無意識の意図的模倣行為であることはどのようにしてか。」

これを考えるときに考慮すべき事柄が一つある。それはサールのいうように意図は因果的自己言及性を持つという言うことである。

「意図は欲求と違って、その意図の内容に表象された当の行為が、その意図自身によって引き起こされたのでないかぎり、実行されたことにならない。行為が別の原因によるならば、意図は実行されたことにならないのである。このようなとき、われわれは、志向的状态の充足条件が因果的自己言及を示すということができるだろう。」⁶

⁵ J. R. Searle, *Mind*, Oxford, 2004, p.157. サール著『マインド 心の哲学』山本貴光、吉川浩満訳、朝日出版社、2006年、p.288。

⁶ J. R. Searle, *Rationality in Action*, MIT, 2001, p. 42. サール著『行為と合理性』塩野直

人がある行為をする時に無意識の意図が働いているのだが、意識しているのはそれとは別の意図だとしよう。このとき両方の意図として実行されるためには、両方の意図がともに原因になってその行為を引き起こしていなければならない。もしこれが不可能であるとすると、無意識の意図が存在していないか、あるいは意識されている意図が本当の意図ではなく自己欺瞞が生じていることになる。

この両方の意図がともに原因になることは可能であろうか。天秤の右側に重り a、あるいは重り b のどちらか一方を置くと天秤は右に傾くとしよう。今仮に重り a と b 両方を天秤の右側において、そのために天秤が右に傾いたとしよう。このとき、重り a を置くことと重り b を置くことが合わさって一つの原因になっているともいえるし、また重り a と b が別々に（ただし同時に）原因になっているともいえるだろう。これと類比的に考えられるならば、二つの意図が一つの行為の原因になることは可能である。

このようにして、無意識の意図的な模倣を想定するうえで、二つの困難が解消したとしても、無意識の意図的な模倣が可能であることの証明にはならないし、またそれが存在することの証明にはならない。

3 無意識の模倣の可能性

(1) 無意識の模倣の条件の再分析

無意識の意図的な模倣の可能性を検討するために、前述の無意識の模倣タイプ 1 とタイプ 2 の条件をもう一度分析しよう。

無意識の模倣タイプ 1

- ①S は、対象 O を欲している
- ②M は、対象 O を欲している
- ③S は、S と M が同一の対象 O（ないし類似の対象）を欲していることを知っている
- ④S は、M が対象 O を欲するから、対象 O を欲している
- ⑤S は、④を知らない

無意識の模倣タイプ 2

- ①S は、対象 O を欲している
- ②M は、対象 O を欲している
- ③S は、S と M が同一の対象 O（ないし類似の対象）を欲していることを知らない
- ④S は、M が対象 O を欲するから、対象 O を欲している
- ⑤ S は、④を知らない

上記における一③（Sは、SとMが同一の対象O（ないし類似の対象）を欲していることを知らない）が成り立つ場合は、次の二つに区別される。もしSが「あなたは、あなたとMが同一の対象O（ないし類似の対象）を欲していることを知っていますか」と問われた場合に、「確かにそうですね。私はそのことに今まで気づきませんでした」と答える場合と、「私は私とMが同一の対象O（ないし類似の対象）を欲しているとは思いません」と答える場合である。

これは一⑤についても同様である。一⑤（Sは、Mが対象Oを欲するからSが対象Oを欲していること、を知らない）が成り立つ場合も、次の二つの区別される。もしSが「あなたは、Mが対象Oを欲するからあなたが対象Oを欲していること、を知っていますか」と問われた場合に、「確かにそうですね。私はそのことに今まで気づきませんでした」と答える場合と、「私は、Mが対象Oを欲するから、私が対象Oを欲しているのだ、とは思いません」と答える場合である。

上で考察したミラーニューロンによる自然的な模倣の場合にも、一③と一⑤の「・・・を知らない」が成り立つ場合は、この二つに区別できるだろう。前者は、指摘されてすぐに気付く場合であり、これは可能である。後者は、指摘されてもすぐには気付かない場合である。予期せぬことであつたり、判断が難しかったりする場合には、すぐに気付かないかもしれない。問題になるのは、その認識を妨げるような「抑圧」が働くようなケースがあるかもしれないということである。したがって、自然的な無意識的模倣のタイプ1とタイプ2には、それぞれ二つの可能性があることになる。単に気付いていないという場合と、その気付きを妨げる「抑圧」が働いている場合である。タイプ2の場合、もし一③の「知らない」が「抑圧」によるものだとすると、その場合には一⑤の「知らない」も「抑圧」によるものだろう。そして逆もまた成り立つだろう。なぜなら、一方の気付きを抑圧する理由ないし原因は、他の方の「抑圧」の理由ないし原因にもなるだろうからである。

これと同様に、意図的な無意識的模倣のタイプ1とタイプ2の場合にも二つの可能性があるだろう。ただし、意図的な無意識的模倣は、一⑤の条件において自然的な模倣と大きく異なっている。タイプ1とタイプ2の場合の一⑤（Sは、Mが対象Oを欲するからSが対象Oを欲していること、を知らない）の「Mが対象Oを欲するから」は自然的な因果関係ではなくて、理由帰結の関係であつた。この場合に、意図的な模倣でありながら、その意図に気付かないということがありうるだろうか。前述のようにアンスコム¹の意図的な行為の定義から生じるかもしれない疑念に対しては、模倣を意図しながらもその意図に気付かないことも可能であることを示しておいた。したがって、「あなたは、Mが対象Oを欲するから対象Oを欲していることを知っていますか」と問われたときに、「いいえ、私は、Mが対象Oを欲するから、私が対象Oを欲しているのだ、とは思いません」と答えることがありうるだろう。もしこのように答えるとするならば、この時に働いている「抑圧」は、これまでの述べてきた自然的模倣における一⑤における「抑圧」とは異質なものである。意図的な無意識的模倣タイプ2における一③の「知らない」についても、「抑圧」が働いてい

る場合があるだろう。この場合に何らかの「抑圧」が働いているとすると、それは⑤を成り立たせる「抑圧」と同じ理由ないし原因をもつと思われる。それゆえに、この場合の「抑圧」もまた、無意識の自然的模倣の場合の③の「抑圧」とは異質であろう。「意図の認知の抑圧」は、単なる「認知の抑圧」とは異質なものである。なぜなら、意図に気付かないことは、単なる事実に気付かないことよりもより強い抑圧を必要とするだろうからである。

無意識な意図的模倣のタイプ1とタイプ2のうち、問われたらすぐに気付く場合がどうして可能であることは、アンスコム¹の意図的行為からの予期される反論の検討、サールの「意図の因果的自己言及性」の指摘からの予期される反論の検討によって、示すことができる。問題は、「何らかの「抑圧」が働いて自然的模倣ないし意図的模倣が意識されないことは可能か否か」「可能だとすれば、どのようにして可能か」ということである。これを次に考えよう。

(2) 模倣の意識の「抑圧」は可能か？

フロイトのいう「前意識」という意味で、自然的模倣や意図的模倣が意識されないことは可能である。たとえば、我々は地球が丸いことを知っているが、しかしいつもそれを意識しているのではない。それを意識していないときにも、それを知っているといえるだろう。これは意識されていない知識である。意図についても同様である。たとえば、私が駅に向かって15分歩くとしよう。この間、常に駅に向かうことを考えているのではなく、他のことを考えながら歩いている時間が多いだろう。しかし、途中で「何をしているのか」とか「どこへ行くのか」と問われると、即座に「駅に行くのです」と答えることができるだろう。このとき、「駅に行く」という意図は、意識されていなかったといえる。これらはフロイトのいう「前意識」になるだろう。

前述の意識的な模倣の条件の一つ③について考えてみよう。③Sは、SとMが同一の対象O（ないし類似の対象）を欲していることを知っている。この「・・・を知っている」は、前にすでに述べたように、もし「あなたは、・・・を知っていますか」と問われたならば、「私は・・・を知っています」と答えられるということである。つまり、常にSが「私とMは同一の対象O（ないし類似の対象）を欲している」と意識していなくてもよい、ということであった。したがって、問われたら答えられるが、意識していないときには、フロイトの前意識であることになる。

では、次の場合はどうだろうか。もしSが「あなたは、あなたとMが同一対象O（ないし類似の対象）を欲しているのを知っていますか」と問われて、「あなたに言われるまで気が付きませんでした、問われてその通りだと知りました」と答えるとしよう。この時には、この知の前意識は存在しない。この時に知が成立したので、それ以前には成立していなかったからである。フロイトならば、このような場合でも、無意識の知が成立していたのだが、Sがこの知に気付いた時に、問われる前にも無意識のうちにこの知をもっていたと

いう場合もある、と考えるかもしれない。しかし、このような場合にも何らかの「抑圧」が働いているので、これは次のケースに含まれるものとして考えよう。

我々の検討したいのは、必要になればいつでも意識されうる「前意識」ではなく、また単なる無知でもなく、意識化が困難な「無意識」であり、しかもその意識化が何かによって「抑圧」されているというケースである。ここでは、その意識化が原理的に不可能であるのではなくて、何らかの事情で困難になっている場合を考えている。

ある事柄（行為や感情や知など）の意識化が抑圧されるとはどういうことだろうか。それは、おそらく意識しないことを欲するとか意図しているということであろう。しかし、これはどういうことだろうか。そのような人に、「あなたは、Xしないことを欲しますか」とか、「あなたは、あなたがpであることを知っていますか」と尋ねたならば、「いいえ私はpではありません」と答えるだろう。この時このひとがpであることの意識化を抑圧しているのだとすると、「あなたは、pであることを意識化を抑圧していますか」と尋ねられたら、「いいえ、私はそのような抑圧をしていません」と答えるだろう。さらに、「あなたは、pであることを欲しますか」と尋ねたならば「いいえ、私はpであることを欲しません」と答えるだろう（もちろん、このように答えるときに、常に抑圧があるということにはならない。）したがって、ある事柄を意識化を「抑圧」するとは、自己欺瞞するということである。したがって、無意識の模倣の抑圧が可能かどうかは、自己欺瞞が可能かどうか、という問題の答え次第である。

ところで、「無意識」概念も「自己欺瞞」の概念も、現代においてもまだ十分に分析されていない概念であるので、これについて論じるには、より周到な準備が必要である。以下では、意識化を困難にする「抑圧」ないし自己欺瞞のメカニズムの二つの可能性を述べるにとどめたい。

（a）両立しない別の行為記述によって、模倣が意識されない場合。

人間の一つの振る舞いを、複数の仕方で行為として記述することが可能である。（このことは、人間の共同作業についても同様である。人間の社会的な行為についても同様である。）しかも、その複数の記述は、前述のような行為とメタ行為の関係にはなっておらず、むしろ両立しない関係になっている場合がある。たとえば、SがAさんに親切にするとしよう。そのときSの行為は、Aさんに親切な人だと思われようとする行為である、と記述するとき、Sが行為は利他的な行為ではなくて、利己的な行為である。仮に、Sが一方で利己的に行為しようとしており、しかも他方では利他的に行為しようとして意図しているとしよう。利己的行為と利他的行為が両立不可能であるかどうかは議論の余地があるが、しかしSはこの二つは両立しないと考えているとしよう。このとき、Sが利他的な意図に注意して、利己的な意図はできるだけ無視しようとするなら、Sがある行為をする時、Sは利他的な理由でそれをしようとしており、利己的な理由を意識しないことが可能である。

行為xをおこなうことが他者の模倣行為になるときにも、行為xを行うことが、別の意

図のもとに理解されており、その二つの意図が両立しないとSが考えているならば、同様のことが生じるだろう。たとえば、独創的であろうとする意図と独創的な人を模倣しようとする意図の場合である。

(b) 判断の模倣から欲望の無意識の模倣が帰結する場合

人間の意図や行為は、多くの信念ないし判断を背景としてもちそれらと結合している。例えば他者Mが「対象Oがよい」と考えて、「対象Oを手に入れよう」と欲求し行為しているとしよう。このときSはMを模倣して「対象Oがよい」と判断し、かつ「Oを手に入れよう」と欲求し行為するとしよう。しかし、このときSは、「対象Oがよい」という判断については、Oを模倣したことを意識しているが、「対象Oを手に入れよう」とする欲求と行為については、その判断に基づいて自分で決めたのであった、Mを模倣したのではないと考えるかもしれない。なぜなら、行為の説明には、判断の模倣だけでも十分だからである。

ある意図の意識化を抑圧して、自分の行為を合理的に説明することができるときには、このようなメカニズムが働いている可能性がある。これに似たメカニズムは、他にもあるかもしれない。これらのメカニズムのより詳細な分析は、今後の課題である。またもっと重要なことであるが、抑圧と自己欺瞞が本当に可能なのかどうかの探求もまた、解決すべき課題としてのこされている。